



## セキュリティ閑話 ・・・インドネシアにて

株式会社 リスダンケミカル  
シニアアドバイザー

吉田 啓一



防犯システム委員会に名を連ねセキュリティを語る機会を得ているが、元来防犯の分野は全くの素人。生業は自称見識豊かな生粋の鉱山（ヤマ）師である。長らく商社で資源ビジネスに携わり、世界中を彷徨徘徊するが如き生活を送ってきた。足を踏み入れたことが無いのは南極大陸と、インドの西からリビアに至る酒に厳しいアラブの産油国一帯。石油ビジネスにも手を染めてはいたが、フランス人の言う『馬じゃあるまいし、酒が無くて飯が食えるか』を実践。鉱山師にとってのセキュリティとは、常に直面を余儀なくされる瞬時にして『命』と『資産』を失うリスクから如何に逃れるかの術に尽きる。防犯で言う侵入盗対策などのセキュリティとは若干ニュアンスが異なる。実業界の鉱山師として初めてセキュリティに取り組まざるを得なかったのは、若かりし頃のインドネシアにおいてである。

突然「極寒の地でのお勤めご苦労、しばらく温まってきては・・・」とインドネシア赴任の話。直前まで、カナダの北極近くで進めていたウラン鉱石探査プロジェクトに、日本勢の一員として加わっていた。湿地帯に囲まれた現場での調査活動は、表土が凍結し大型資機材の運搬が可能となる冬季間がピークとなる。作業が一段落して帰国の春先のことであった。－40°の地から温度差80度の赤道直下へ。今なら人権問題、業務命令に名を借りたイジメとでも言うところか。

インドネシアはスラウェシ島（旧名セレベス島）でのクローム鉱石開発プロジェクト。ジャングル地帯の探査権を獲った地域で鉱石の品位や鉱量などを調査し、結果が良ければ日本側でコンソーシアムを組み本格開発に移行するというもの。先乗

りして現場の調査に当たれというのが課せられたミッション。全く気乗りせぬまま日本を出発。途中台北・ジャカルタで打ち合わせ。そのまま逃亡も能わず、現場入りのタイムリミットも迫る。終に覚悟を決めスラウェシ島最大都市ウジュンパンダン（旧名マカッサル）へ飛んだ。幸いウジュンパンダンには駐在員事務所が在った。鉱物資源とは全く無縁、エビの養殖事業が柱であり水産部門の出身者が常駐。今後はこの事務所が外部との連絡拠点。火急の際には救援隊長を務めてもらわねばならぬ駐在員は命綱でもあり丁重に挨拶。別れの杯を交わし、いよいよ現場入り。現場はウジュンパンダン北方約250Km、内1/4程度はケモノ道同然の道無き道。前進には、各所で枝払い・穴埋め・橋渡しの繰り返し。丸々1日をかけ、やっとベースキャンプ地となる現場ふもとの部落に到着。

周辺の地理に詳しいガイド、資機材運搬要員、コックなど総勢10余名、これに馬2頭が調査隊の陣容。地図だけを頼りにジャングルを歩き回り、しばらくは苦楽を共にする仲間である。度胸と体力のみが勝負。まずは調査区域内の数ヶ所にサテライト基地とする小屋の設営。時には基地に戻れず、ヤシの葉を敷き詰めた寝床で蚊帳の網布を体に巻き一夜を過ごすこともある。靴を履く前には必ず逆さ振ってサソリがいないかを確認、ベッドの脚はタバコの葉を溶かした水を満たした空き缶に浸し毒虫が這い上がるのを防ぐ、など身を守るための細かな注意が欠かせない。健康管理は当然自己責任。さりとて高温多湿の地での限られた食材で過ごす生活では、体重は日を追うごとに激減。主要な常備食は現地調達のインスタントラーメン・サバの缶詰・アスパラガスの缶詰。連れ歩く鶏が時々つぶされ供されるのが最高のご馳

走。極寒の地ではないので「衣」はともかく、常に頭をよぎるのは明日の「食」「住」の確保。

陽が落ちるとヤル事は全く無い。乏しい燃料のランプ生活では本気で読み書きをする気にもなれず。月明かりの夜は、一人空を見渡せる高台でウイスキー片手に人工衛星を数え、オーストラリアからの日本語放送で日本の「情報」を漁る。しかし、専らの暇つぶしは「現地語」の習得。インドネシア語にはbe動詞もdo動詞も無い。しかも時制も無い。ひたすら単語を覚えるだけ。表記はアルファベットで、読み易く、発音も楽。数学のような表記もある。jalan<sup>2</sup>（散歩）・laki<sup>2</sup>（男）など。単語そのものも覚えやすく面白い。例えばイカ、イカは墨（チュミ）を吐くのでcumi<sup>2</sup>（チュミチュミ）。isteri（ヒ？ステリー）は妻。早々に一人前の現地語使いとなる。ジャカルタ出張時などタクシー運転手に南部スラウェシの出だろうと言われる迄に、方言使いの完璧なインドネシアの田舎者に仕上がっていた。

山賊が横行する物騒な一帯と聞いていた現場ではあったが、予備調査は事故も山賊の襲撃も無く無事終了。苦楽を共にした調査隊の面々とは、公私に亘り親密な付き合いが出来た。これは先人のおかげでもある。戦時中、セレベス島に進駐の日本軍は規律正しく、現地人に危害を与えることの無い「義」の集団であった由。オランダからの解放は日本あってのことなどの面はゆい話もされた。掛け声は“イチ・ニ・サン”。“サイタ サイタ サクラガサイタ”などと教科書を誦んじ、記憶している兵隊の名前を次々に口にする年配者。己の無知に恥じ入るばかりであった。

その後プロジェクトは開発への移行が決定、新たに日本のコンソーシアム各社から10名弱の日本人が現場入り。ジョイントベンチャーのパートナーであるインドネシア企業のスタッフを含め総勢20名程度の現場常駐者、及び約200名の現場作業員による開発会社の船出となった。リスク管理の項目に新たに「ヒト」が加わった。意思疎通も儘ならぬ出来たての国際社会と本籍会社が異なり年代も専門分野もバラバラの会社人間から成る小さな日本人社会、それぞれの社会の円満な運営と両

者の友好関係の維持である。掘立小屋で、電気も無い、嵐がくれば濡れ鼠、粗末な食事、加えて危険で過酷な任務を負って共同生活。「ヒト」の和が崩れることの怖さは、経験した者のみが知るところである。

現場が採鉱部隊による生産体制が整いつつある状況に至り、日本向けの初船積みを待たずして足掛け2年の滞在を終え帰国。 またしても日本での長期滞在は能わず。次の任地はアフリカ大陸最西端の国セネガルの辞令。首都ダカールに居を構え、西アフリカ全域10か国余りの兼轄である。まずは黄熱病・マラリアなどの「風土病」対策。政情不安の西アフリカ地域では常にどこかで「クーデター」・「戦争」の芽。砲火・命がけの脱出劇も、一度や二度ではなかった。セキュリティの質と各論はさながらフォーサイスの小説もどき、4年を超える内容の濃い滞在でリスク管理のプロと自認するに至った。

アフリカの後も、世界各地を転々としたが、頭の内は常にセキュリティの確保。しかしセキュリティの確保には完全はあり得ず。巨大な隕石の地球への衝突を止める術があろうか。幾多の武勇伝はあったものの、幸い生き長え又組織の資産に大きなダメージを与えることも無く、波乱万丈の外国生活を終え日本に帰還。かくして辿り着いた哲学がセキュリティ三か条、『無私』と『総論排除の各論主義』そして『豹変が許されるのは君子のみ』。皮肉にも我が人生で、隕石にも等しい最悪のリスクに直面したのがこの日本。原発の再稼動がかまびすしい。最近の日本全体の潮流はわが哲学と真逆の方向に向かっていると思えてならない。さすれば、我が尺度からすると国としてのセキュリティの放棄、即ち破滅への道ということか。地球の内部構造やプレートテクトノクスがどうだこうだと論ずる学問を長らく専攻していたこともあり声高に原発反対を唱えていた。しかし実業界に身と転じ、ウラニウム鉱石探し、精錬・濃縮と、この産業に関わってきた自戒の念もある。インドネシアでのジャングル生活や年配者が語るに旧日本軍の昔話がことさら懐かしく思い起こされる今日この頃である。